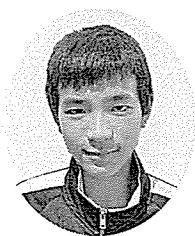


佳
作

故郷を守るために

ニセコ町立ニセコ中学校2年

下^{しも}田^だ
珀^{はく}



下田 珀

日本で唯一カタカナの町。パウダースノーの町。国内で初めて自治基本条例を策定した町。環境モデル都市。スキートのリゾート地。あなたはいったいどこまで聞けばニセコ町だと分かるだろうか。僕はこの町に住むこの町が大好きな中学生だ。今回はそんなニセコ町への僕の考えを書いた。

まず、ニセコ町について少し説明しよう。ニセコ町は北海道、虻田郡にある通称『羊蹄山麓』の中のひとつである。このなんとも覚えやすい「ニセコ町」という名前はアイヌ語の「ニセイ、コ、アン、ベツ」(峡谷にある川)に由来している。この川は「ニセコアンヌプリ」から南に流れる「ニセコアンベツ川」のことである。もともとニセコ町は「狩太町」という名前で、「真狩村」から分村してできた。この地域は昔から雪が多く、現在は「日本海側気候」に分類され、季節風の影響で世界的に有名なパウダースノーを多く降らす。そのため、冬は多くの観光客が訪れる。その結果、外国人移住者が年々増え北海道内では三番目の増加率となっている。また、国内で初となる「自治基本条例」を二〇〇一年に施行した。ニセコ町は「暮らしづくり」に力を入れており、「情報共有」、「住民参加」を二つの柱として発展を目指している。最近では、環境を大切にしようという動きもあり、二〇一四年には「環境モデル

都市」に選定された。豊かな自然に囲まれており、羊蹄山、アンヌプリ、昆布岳と標高の高い山、さらに長さ一二六kmを誇る尻別川が流れている。多種多様な生物が息しているこの町は釣りスポットとしても有名で、「オシロコマ」、「イトウ」などといった珍しい魚も確認されている。個人的な意見だが、ニセコ町は最高な町だと思っている。

ここからは僕の自分史を書いてみた。

僕の両親は北海道出身ではない。そのため、僕は東京の病院で産まれた。だが、家が北海道にあったので、すぐにニセコ町に来たのだ。僕の家は曾我にあった。小学一年生になるころに有島に引っ越しをしたのだ。父はもともとアウトドア関わる仕事をしていて、たまたま修理のために壊れたスノーモービルを持って帰ってきた。そのおかげで当たり前にスノーモービルに乗って、他にもラフティングや気球も当たり前にしていた。今思えば、ニセコじゃなくてもできなかったかもしれないし、父がアウトドアに関わっていないなければできない体験だとすごく感じる。母は色々な仕事をしていたが、これまたアウトドアに関係していることが多く、毎日毎日散歩して遊んで自然に溶けこめていた。僕は、最初にニセコに来た時が曾我で良かったと思う。なぜならば、ニセコという町の印象をすごく良い場所として

故郷を守るために

知ることができたからだ。ニセコ町の恵まれた自然環境の中で暮らす。このことは本当に幸運なことだと思う。

僕の幼いころの思い出の中で一番大きなものは日々の散歩だ。散歩のコースは毎日ほとんど同じで、二匹の犬と友達の家といっしょに歩いた。この散歩こそがもつとも自然に近かった気がする。そのコースは通称「トラクターの道」で、舗装されていない林道のような道だ。キツネやリス、ミミズからカブトムシまでたくさん見つけた。その道の折り返し地点には立派なナシの木が立っていて、秋になるとおいしい実がなる。とにかく、幼かった僕には最高の道で、すごく楽しかった。まず、春だ。春には残雪があり、雪解け水がそこらじゅう流れている。まだまだ寒いが少しでもフキノトウが芽生え始めると、冬が終わってしまったという悲しみと同時に、緑が包みこんでくれるうれしさと、生き物たちの鳴き声が聞こえてくる。僕たちはよく、ツクシをたつぷりとっては犬のエサに混ぜていた。なぜか知らないが犬はそれを食べる。何とも言えないうれしい気持ちだった。家にコイノボリが立つと、毎年毎年、「屋根より低いね〜」なんて言っていて笑っていた。春が終わると、夏が来る。ニセコの夏というのは長いようで短い。暑いようで寒い。そんな感じだ。夏は毎年、セミの声がうるさい。トラクターの道もだ。セミは確かに鳴いているの

に見つからない。森の中の虫はうるさいのに見えなかった。でも、姿を見せるやつもいた。それは母が嫌いなあいつ、そう、毛虫だ。あいつが道を歩いているだけで母は悲鳴を上げる。帽子についていたりなんてしたらもう、うるさかった。僕は棒があれば平気だから、毎回つてあげていた。まあ気持ち悪いけど。とにかく、毛虫が大量発生した年の母は、散歩に行く度ともうるさかった。でも、大量発生して欲しいのは、あの虫だ。ご存じかもしれないがカブトムシだ。あの虫は小さいころから大好きで、カラスに喰われて残った立派な角だけ見ても大興奮だった。やつは街灯の下に蟻にまぎれてたまに居る。あのかっこいい羽音、ピカピカの骨格ときたらたまらない。遠くからでも一目瞭然の反射した光が目に入ると、ただただうれしかった。トラクターの道は、雨が降ると水たまりが多くできた。長靴での散歩は楽しい。水たまりでジャブジャブするのがなぜか好きだった。でも、雨は恐ろしい。尻別川がその例だ。その色は濁りに濁り、いつも見えていた岩は見えなくなるほど水が多い。こういった多様性もニセコらしさを多く感じられた。でも、ニセコの夏は気付けば終わっている。秋になる。自然の色は鮮やかさと寒さを連れてくる。言葉では伝えにくいけど、羊蹄山はおもしろい。上からだんだんと赤茶っぽくなっていく。秋のおとずれが目に見

下田 珀

えるのだ。言い表せない美しさとおもしろさは幼い僕でさえ感じられた。徐々に緑が無くなっていく。いつもの散歩が楽しさを増していた。個人的に、秋のトラクターの道が一番好きだ。言っていなかったけど、僕は三人兄弟の長男だ。それで、秋の散歩は理由があまりないが楽しい。覚えていることとして枯れたイタドリにまたがって、弟といっしょに馬だと言って遊んだ。大した意味もないのに余りに楽しかった。他には、ピンク色の茎が多く落ちていて、それを拾ってはどっちが多いか比べた。ニセコの自然を目いっぱい使って遊んだつもりだ。先でも言ったが、終点にあるナシの木には西洋ナシみたいのがたたくさんあった。それほど覚えてはいないが、もう美味かった。シャキシャキとした食感丸かじりしなきゃ分からない。その場で食べていたから。ニセコの秋というのは楽しさに満ち満ちていると思う。この経験はとてとても貴重なのだと今になってようやく分かる。羊蹄山が雪をかぶると、長い長い冬が来る。ニセコといえばの季節だ。昔から大雪を見ていたためか、散歩のときは毎回楽しく歩いてきた。トラクターの道は除雪されない。そのため、冬になるほどトラクターの道に行く回数は減った。他のコースに行くのも楽しかった。雪というものは万端で、雪さえあればいつでも遊べた。昔から僕は除雪車が好きでたまらなかつた。だから

か、よく除雪車のマネをして遊んだ。だが、寒い日の散歩は少し違った。吹雪が吹く日、いつものように楽しくはしゃいで散歩に出かけると、帰り道の途中でスタミナが切れたのだ。ただ寒い中を歩くのは地獄であり、手袋が凍ったり、靴に雪が入ったりなんてするのは当たり前で。でも寒くて。吹雪だけは慣れることができない。想像をこえてくるのだ。今でさえあの寒さは避けたい。でも、ニセコだからこそ景色であり、ニセコだからこそその気温、それから天候。これも今考えれば経験しておいて良かったと思える。そのことはなんだかうれしかった。北海道の一部の人しかできない経験を毎日のようにできたからだ。このころはいつも、アンヌプリ国際スキー場のナイターで父といっしょにスキーを楽しんだ。結局いつも一時間ほどしか滑れなかつたが楽しかった。だけど冬は寒い日だけではなかつた。とくに雪が降った次の日、その日が晴だった場合は思いきり遊んだ。近くの雪山でそり滑りをしたり、父のスノーモービルに乗ったり、雪合戦をしたり。でも一番といても過言ではないほどに楽しかったのは家のすぐ横を通る除雪車をマジマジと見つめることだった。その大きさ、形、動き、全部が最高にかっこ良い。いつもいなくなるまで見ていたほどだった。除雪車が動いていないときは除雪車に登り、さらに細かく観察した。それが僕なりの一

故郷を守るために

日だった。やがて、雪が少しずつ減り始める。少しベシヤツとしたシャーベットが道路を包んでいた。個人的にこの雪が一番好ましくなかった。その雪は何もかもを濡らしてしまうからだ。何も作れないし固くて凍りやすい。これぞ雪解け水っていう水が下を求めて流れていく。ゆつくり、でも確実に動く自然が感じられた。長い長い冬が終わる時だ。また春がやってくる。徐々に散歩のコースも増え、温かさが伝わる。雪解け水が尻別川に辿り着くころには増水した川だらけだった。僕の一年はこんな感じだった。引越すまでは…。

ここまでが自分史の第一部である。続く第二部は同じニセコ町内にある有島武郎ゆかりの地、「有島」に移り住んだところから始まる。

初めての引越。それは、幼稚園最後の夏だった。僕の新しい家は有島にできた。その時はとにかく楽しくて、新しい匂いがしていた。そこには周りにあまり家がなくて、近所には二人同じ年の子がいた。すばらしい環境だった。でも、何よりすばらしかったのが家のすぐ横にあるちよつとした広場だった。広場といってもただの雑草が広がっているだけだった。しかしそこには多種多様な昆虫がいたの

だ。一番いたのがあのトノサマバッタだった。一步踏み出せば一面にいたバッタやチョウが飛んでいた。虫とりが大好きだった。僕と弟は見たこともない虫たちに興奮していた。早速買ってもらった虫とり網で思いきり遊んだ。トノサマバッタをとるのは特にむずかしく、二人で協力したり、音を無くしてひっそりと近づいたりして捕まえていた。でも、チャンスが少ない虫もいた。カラスアゲハだ。あの羽の色、静かな移動はなんとも美しい。あの虫はいつでも来る訳ではなかった。一日に来る時間は短く、まったく捕まえることができなかった。でも、やってきた時には確実に捕まえていたと思う。あの頃の虫とりは最高に楽しかった。有島での散歩はトラクターの道と同じくらい楽しかった。何より、新しい道だからだ。さらに、前の散歩よりもコースが多く、新しい散歩を毎日楽しんでた。この散歩では、林道を歩いたり、車道を歩いたり、なんでもできた。冬は周り一帯の森をスノーモービルで走りぬけ、最高に楽しかった。やがて、一年生になった。そこはギリギリバス通学で、もうすぐ徒歩通学という場所だった。初めて一人で乗るバス。でも、学校にはすぐ慣れた。学校に行くのは当たり前になり、毎日の散歩、勉強という毎日が続いた。そんな中、僕はサッカーを始めた。少年団は二年生からしか入れないので、一年生のころは家で一人で遊び

下田 珀

ながらやっていた。初めての夏休み。毎日のように虫とりをした。一年生の誕生日、僕は六段ギア付きの自転車を買ってもらった。すごく気に入った僕は毎日のようにサイクリングもするようになった。有島に来てからは毎日が楽しくて、あっという間に過ぎていった気がする。迎えた二年生、サッカー少年団に入った僕はさらに外にいる時間が長くなった。暗くなるまで毎日遊んだ。でももう一つ始めたことがあった。今でも大好きな釣りだった。ニセコで釣りをする人は、ほとんど釣りをしにニセコに来た人だと思う。だが僕は、近くに流れている小さなカシユンベツ川で見よう見まねに釣りを始めた。いわゆる「エサ釣り」だ。しかし何と、初めて行った日に魚が釣れたのだ。魚を釣る感覚に一度ハマってしまった僕はそれから毎月釣りをするようになった。有島に来てからも大自然に囲まれている毎日があり、うれしかった。さらに、決して常に自然が変化しないわけではなかった。なんと七年間で近所に家が5軒も建ったのだ。誰が悪いという訳ではなく、仕方ない事だった。でも、あのバッタやチョウたちは、今は居ない。それどころか、家の周辺以外の場所でも今まで居た生物が居なくなっていることが多くあった。こういった自然が失われていることに気がついたのは、最近のことだった。もちろん、自然が増えていたということもある。でも明らか

に減りが早かったのだ。僕は悲しかった。バッタやチョウなどの様々な生物が居たころの写真を撮っておけば良かったと思った。それこそいつも普通だった景色が思い出せない。これが何より悲しいのだ。家が建ち始めたころの自分は、近所が増えた！とか友達になれると感じていたのだろう。だが、失われた物は何もない。ということが良く分かったのだ。もう一つ悲しいことがあった。ゴミだった。これも気付いたのは割と最近のことだ。歩いているとどうしてもゴミが目に入る。あなたもそう感じたことはないだろうか。すごくいやな気持ちになった。そんな中、ニュースではゴミ問題の話題も多くなり、さらにゴミへの違和感を感じるようになった。父の提案で、僕はゴミ拾いをするようになった。そして、それがだんだん楽しいと感じるようになった。結局、すべて人間による環境破壊が原因だと考え始める。有島に来ると、曾我で毎日のように通っていた道を通らないものだ。久しぶりにその道を通る機会があった。その時のことはよく覚えている。木しかなかったその道はいつの間にか森林伐採が進み、ホテルやアパートだらけになっていた。この時も前どんなだったか思い出せなかった。やはりそこに居た生物たちは居なくなっていた。ニセコは自然しかないと思っていた小さいころの自分にとってはひどく残酷な出来事だった。地球上で進ん

故郷を守るために

でいる出来事を目の前で見ることができたこの経験も開発が進んでいるニセコじゃなければできなかったかもしれないし、家の周りに新しい家が建ったりした有島でなければ見られなかったかもしれない。身近なちよっとした変化を見つけられることが課題を見つけることにつながるのだと思っただ。

自分史の第二部はここで一旦区切り、ここからは今自分が感じている事やニセコ町への思いを書いてみようと思う。

僕はまだ十四年しか生きていないが、ニセコは僕の故郷であり、最高の町だと思っている。他の地域に負けない魅力と環境がそろっているからだ。事実、ボクが経験してきた事はニセコでなければできなかったことであるし、このニセコでの暮らしの中で気付いたことだらけなのだ。その一方で、問題と課題も沢山ある。例えば、環境破壊が起きたり生態系が狂ったりなどだ。結局どれも人間の手によるもので、絶対に改善していかなければならないことだ。当たり前前だった風景が壊されたり、生き物が居なくなったり。ニセコに居るからこそ分かる変化があると思う。自然が破壊されている状況を、変えたり直したりしていくこと

ができるのは、その事に気付き行動を変えることができる人間だけなのではないだろうか。人という生き物は長い歴史の中で欠片の欠片にすぎない。そんな僕たちが生き物たちみんなの家である自然に変化をもたらして過ぎたのではないか。この状況はおかしい。だからこそ最近発表された「SDG's」。これを徹底することが、僕たち人間が出来る最大で最高のことなのだ。小さな身の周りの変化から世界的な問題まで一本の線であることを忘れてはいけない。将来の世界、いや、未来を作っていくのは僕たちなのだ。今の地球上に住んでいる全ての生物が全ての物事に関わっていて、全員で次の一步を踏み出すにはどうすればいいのだろうか。それは今自分に何ができるかを考え、目を向けて課題に取り組むことだ。例えば、鳥が釣り糸にからまって死んでいるという事件がよくある。鳥に限ったことではない。その他の動物たちもたくさんゴミによって命を落とされている。この事を僕たちがどう受け止めるか。こういったことを他人事だと思っていないだろうか。しかし、もし僕たちが自主的にゴミ拾いをしたり、呼びかけたりすれば命を落とす動物が減るかもしれない。こういったことの積み重ねがあれば、一つずつ問題を無くしていけるのだ。

自分の故郷を守る。伝統を守る。そのためにまず、自分

下田 珀

で考え、やってみる。自分ができたら、協力して他の人、さらに動物から地球の事も考えてみる。僕がニセコに住んでいて自然から学べたこと。このことを活かさなければ何の意味もないのだと今になって感じる。これからどんどん大きくなっていくニセコという町、そして世界の将来の姿をつくっていくのは今を生きる人々、そしてこれからを生きる人々なのだ。自分より前を生きた人々がつくり、つないできた文化、伝統を守り、さらにつなげる。その鍵になるのは希望と可能性をもった僕たちなのだ。